
リロード *凍結中*

杉村祐介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リロード *凍結中*

【Nコード】

N2516T

【作者名】

杉村祐介

【あらすじ】

「『狩猟姫ナガレ』は死んだ、もうこの世にはいないんだ」

凍土にハンターの少女がいた。彼女は身体中に大きな傷をつけ、瀕死の状態で歩いていた。そこに鉄の銃槍を背負った、ユクモ村の少年が現れる。

少年に助けられ、村に来た少女。彼女は少年の心に触れて、大切な何かを思い出す……。

*凍結中です。必ず帰ってくるからね！

凍土と少女（前書き）

この小説はモンスターハンター、特にMHP3の世界観や設定を主軸に

作者の想像を多少含ませて作られた物語です。

独自の解釈などありますが、広い心で読んでいただけたら幸いです。

又この作品は他のモンハン二次創作の続編になりますので、

お時間ある方は「銃槍ファイト!」と「消えた牙折リ」を読了することをおススメします。

（上記作品を読まなくても内容は理解できます）

それでは、これから不定期連載ですが

よろしく願いますm（――）m

凍土と少女

凍土。そこは人間を拒む自然の城塞。城塞にして楽園、楽園にして地獄である。そんな凍土に一人のハンターの姿があった。

彼女の名前は閻星ナガレ。二十歳にも満たない背中には、上質な武器「業火竜砲」の姿が見える。赤い銃口から繰り出される威力は、火竜のプレスと同じ威力と言われているほど強力な、ハンターなら誰もが憧れるランクの武器だ。

しかし彼女はハンターの命と言える武器はあれど、鎧と言える物を一つも着けていなかった。そして身体中に無数の傷をつけていた。肩から腕にかけて晒された傷口からは血が流れており、滴り落ちて雪を紅く染める。壁に手を当てた右手にも無数の擦り傷があり、身体中についた打撲、切り傷からは死闘の後が見える。そして右足は痛みで動かず、壁づたいに足を引きずって歩いていた。満身創痍とはまさにこの事だろう。

自慢だった長い髪も血でべっとりと汚れ、白い肌は青いアザや傷で腫れていたり、酷い所はえぐれていた。彼女はすでに体の感覚を失い、気持ちだけで歩いていた。

「もう少し……」

ナガレはベースキャンプを目指し、倒れそうになる体を壁にもたれさせながら歩いていた。しかし彼女は凍土の向こう側、雪山と呼ばれる場所を主に狩りをしていたので、この地理は全く知らなかった。しかしハンターの勘とでも言うのか、ハンターとしての本能が行き先を示している……そう思って動いていた。たとえそれが間違っていたとしても、それ以外に彼女が信じるものはなかった。

角を曲がり、細い道を紅く染めながら進む。しばらく歩くと開けた場所にたどり着いた。しかしそこはベースキャンプではなく、ガ

ウシカが蹄を鳴らして走り回る、雪が降り積もる広場だった。さらに広場の中心には大型獣の「白兎獣」ウルクススが、耳を立てながら辺りを見渡していた。

「ハハ、私は死ぬまでハンターか」

ベースキャンプよりも獣を探し当てた自分を笑い、霞んだ瞳で空を見上げた。雪がしんと降り続く空は、黒い雲に覆われて静かに泣いている。

白兎獣は血の匂いを嗅ぎ付けると、ナガレに威嚇の雄叫びを上げた。彼女はやっと視線を下ろし、目の前の敵と向き合った。もはや背中 of 軽弩に手をかける力も、横に転がって避ける体力もない。

凍土のあちこちに埋まる骨と同じように、私も雪に埋もれて消えるだろう。ナガレはそう思うと、不安や怒りもどこかへ消えた。

残ったのは、死を覚悟したハンターの心だった。

「……元気でな、可愛い妹よ」

白兎獣は得意な突進で、傷だらけの少女を狙う。たとえ相手が死にかけてであろうと、か弱い存在であろうと、情をかけないのが自然であり獣である。

ナガレはハンターとして、死を、強大な敵を恐れて逃げ出した事は何度もあった。しかし今は何も感じない、不思議と怖くない。そんな気持ちで最後を迎える自分が、自分でない気がしていた。

その時、甲高い音が辺りに響きわたる。

白兎獣が飛び起きるように体を振るわせ、その場に立って頭をふらつかせていた。さらに二人の間に、赤紫色をした装備に身を包んだ少年が割って入る。

「大丈夫ですか?!」

少年は右腕に大きな盾をつけ、右手には太い鉄製の槍を構えてい

た。しかし槍にしては余りにも太く、戦いには不向きに感じとれる。
「ウルクススを引き付けておくから、早くあつちに！」

ナガレは突然の救援に混乱して、頭がうまく回らなかった。少年の二回目の呼び声に我にかえて、やっと言葉が聞き取れる。

「君は……？」

「いいから早くー！」

少年の強い声に、ナガレの眼からはさっきまでの眼光は消え、ただの少女の瞳に戻っていた。そして言われるがまま、血だらけの体を引きずって歩く。白兎獣がめまいから立ち直ると同時に、少年が槍を足めがけて突いていた。

肉が切れ、血渋きが上がる音を聞きながら、ナガレは歩き続けた。

彼女がしばらく歩くと、雪をかぶったテントが見えてきた。その横には赤と青の箱が野ざらしに置いてあり、テントの中には四人ほどが寝れる簡易ベッドがある。そう、ここが目指していたベースキヤンプだ。

「ハンターさん！」

ナガレの後ろから、槍を背負った少年が追いかけてきた。どうやら白兎獣からは上手く逃げてきたみたいだ。

「すぐベッドに寝て、安静にして」

少年は言うと同時にポーチから筒を取りだし紐を引っ張った。すると筒から煙が吹き出して、空へ空へと昇っていく。これはハンターが定まった条件——特定の種を狩る、アイテムを持って帰る等——を無理だと判断した時、ギルドへ報告するための発煙筒だ。

ナガレはそれを見て止めようとしたが、言う前に実行されては仕方がない。悪い事をしたと思いながらベッドに寝転んだ。ベースキヤンプのベッドは何か細工がしてあるのか、不眠症にでもなっていない限り、一分も立たない内に熟睡できる。ナガレは体を酷使してきた分だけ、強い睡魔に教われた。

「君、名前は……？」

眠りにつく前にナガレが聞くと、少年は隣で笑って返事を返した。

「月歩って言います、とりあえずゆっくり休んで下さい」

「すまない、月歩く……」

ナガレの意識はすぐに遠くなり、深い眠りに入ってしまった。

凍土と少女（後書き）

……何度投稿ではじかれたことかorz

ganmaです、作品読んでくださってありがとうございます！

今回はライトボウガンの少女ナガレが主人公です。

もう気付いてるでしょうが、ナガレはあれのあれです（伏せる意味は特に無いw

というわけで、なぜ傷ついているかも想像できるかと思います。

では、不定期更新ですが温かい目で見てくださいるよう

これからよろしく願いますm（―――）m

ユクモの少年（前書き）

短くてすみません（´・ω・｀）

ユクモの少年

ナガレが目を覚ますと、見知らぬ部屋のベッドに寝かされていた。身体中についていた傷やあざは包帯やシップで治療されており、薬独特のつんとしたにおいが鼻を刺す。

体を起こすと、隣に月歩が居ることに気付いた。こちらに背中を向けて、黙々と手を動かしている……。その横には「燃えないゴミ」が何個も散らばっていた。

「できたーっ!!」

月歩が両手を上げて叫んだ。そのときナガレの視線を感じたのか、振り返って彼女が起きていることを確認すると、顔を赤くして縮こまる。

「気がついたんですね」

「ああ」

すると彼はさっき作ったのだろう赤い丸薬を、袋につめてナガレに渡した。一センチもない大きさのそれは神秘的に煌いている。

「これ薬です。無理せずにゆっくり休んで下さいね」

そういつと月歩は散らかった道具をポーチにしまってそそくさと部屋を出ていってしまった。一人残されたナガレは渡された薬をみて驚く。……いにしえの秘薬、驚異的な回復力をもつ薬で、一流の調合師でも成功率の低い幻のアイテムだった。

豊かな木々に囲まれた山の中腹に、温泉が有名なユクモ村がある。紅葉した木々を見ながらの露天風呂はハンター達にも人気のようで、湯浴み客として訪れる者も多かった。傷ついたナガレは村の宿に寝かされていたのだ。

あれから毎日月歩からの差し入れで栄養剤を飲み、さらに元からナガレの身体が丈夫なこともあってか、一週間で身体の傷はほぼ回復していた。部屋で両腕を回したり、足を上げて調子を確認したが、

怪我をする前より調子は良さそうだ。

ナガレは月歩に一言お礼を言おうと、宿の浴衣をはおって部屋を飛び出した。実のところ彼女はまだ月歩にお礼を言うどころか、ともに会話もできていない。栄養剤は朝になれば枕元に手紙と共に置いてあり、食事は宿屋のアイルー——知能が高い二足歩行で歩くネコ——が持つて来てくれていた。

部屋を出ると、いくつかの部屋に繋がっている廊下に、桃色の着物と頭の大きなかんざしが印象的な一人の女性がいた。その姿は優雅という言葉をややすくと越えた美しさと、ただ歩くだけの行為にもみてとれる気品。両方を兼ね備えた、まさに女性の鏡のような姿だった。

「あら、お身体はよろしいのですか？」

そんな女性が話かけてきたものだから、ナガレはビクリと肩を振るわせてしまった。元々引込み思案な性格で、初対面ではつい身構えてしまうのだ。相手が絶世の美女となると、自分に引け目を感じて余計に酷くなる。

「あ……貴方、は？」

「私はこのユクモ村の村長をしておりますの」

オホオホ、と村長はこれまた上品に笑顔を見せた。笑う事すら上品な村長の姿を妹に見せてやりたい。ナガレはふとそんなことを思っていた。

「お話は月ちゃんから聞いておりますわ。ハンター様もさぞお疲れの事と思い、宿と食事を用意させて頂きました」

「おかげさまで身体の傷は治りました。お心遣い、誠にありがとうございます」

ナガレは敬語でお礼を述べた。当たり前的事だと思った方には注意しておくが、ハンターと言う職業は自己の意識を強く持つておかないと生きていけない……要するに自分が最強だという意思が、ハンターには必要なのだ。それゆえ敬語を使わずに会話する者は数多くいる。そして敬語を使う者の多くは臆病風にふかれ、小さなミス

から命を落とす……。それを知っているからか、村長は少し驚いていた。

「いえいえ、当たり前前の事をした迄ですし、月ちゃんの頼みとなれば見てみぬふりはできないですわ」

「その、助けてくれた少年は今どこに？」

「クエストに出たのが一時間前ですから、きっとそろそろ……」

噂をすればなんとやら、村長の後ろから二人の男の声が聞こえてきた。

一人は鎧武者を彷彿とさせる紅い「リオレウス」の全身装備に、背中には黒い鞆に納められた身長ほどある「ナルガクルガ」の太刀を背負った男。そしてもう一人は赤紫色をした「ドスジャギィ」の革でできた服に、右手には大盾、背中には半分に折れて収納された鉄の「討伐隊正式銃槍」がある少年。ナガレを助けたハンター、月歩だ。

村長が二人のハンターに声をかけた。

「お二人共、ご無事で何よりですわ」

「何言っただ、ただの採取クエストじゃないか。無事で帰れない方が無理だろ？」

答えたのは、リオレウスの鎧を着たハンターだ。村長に対しても敬語なんて使わない、これが普通のハンターの会話なのだ。

「いえいえ、いつ何があるかはわかりませんから」

そう言々と村長はリオレウスの鎧を着たハンターを連れて宿から出ていった。きっとクエストの報酬やクリアした手続きをするのだらう。

ナガレは気を取り直して、命の恩人と向き合う。月歩も彼女の視線に気づいてこちらを向いた。

「その、月歩君……色々ありがとう」

「いえいえ！ そんな事より、名前はなんて言っんですか？」

月歩の言葉に少し間を開けて返事した。

「ナガレ、闇星ナガレだ。よろしく」

「こちらこそ」

月歩はニコツと子供じみた笑顔をみせたので、ナガレも釣られて笑う。彼女はさっきの村長ほど気品はなかったが、自然に、かわいらしい笑顔を見せていた。

「ついでにギルドカードも交換しましょうよ」

「……待つて！」

そう言った月歩はポーチをがさごそと漁った。しかし、ナガレがそれを止める。

「私、ギルドカードを持ってないんだ」

「でも、あの火竜弩は？」

「あれは……お、親の形見だ」

ナガレは、嘘をついた。

本当はギルドカードを持っている。

業火竜弩も自分で作った物だ。

故郷である雪の町では、最強とまで言われていた。

しかし彼女は全てを隠して、この村で生きようと思った。

ユクモの少年（後書き）

今回の話で村長なんか違うなあという人がいたらすみません。
できれば出したくなかったのですが、流れ上必要になってしまい……

さて次回はいつになるやら（え

新しい日常

「ナガレさん、そっちはどうですか？」

「順調に集まっているよ」

ナガレがピッケルを降り下ろした。壁の亀裂から、鉱石の入り交じった石ころが足下に散らばる。それを一つ一つ丁寧に識別して、使えそうな物を袋につめた。

ナガレは今、月歩と共に凍土の鉱石を取りに来ていた。狙うのは血石と呼ばれる深紅の石。凍土の特産物でギルドも高く買い取るアイテムだ。この血石を欲しいと言った風変わりな学者の依頼で、高い報酬と楽なクエスト条件に、貧乏まっしぐらの三人が食いついたのだ。

三人とは勿論ナガレ、月歩、シュラの事だ。ナガレは今着ている新米ハンター用防具『ハンターメール』などを買って金欠だし、他の二人も同じようなものだった。

しかし、

「リオレウスのハンター、一人で大丈夫なのか？」

「あの人なら、僕より百倍強いから大丈夫ですよ」

シュラはナガレを酷く嫌っていた。二人とは初めから別行動をして、今は洞窟内をうろついていた。

話は数日前にさかのぼる……

二人が廊下で話をしているとところに、シュラが村長との話を終えてやって来た。

「手続き済ませておいたぜ」

「ありがとうございます、シュラさん！」

気にするなと言って月歩に手を振ったシユラは、その隣にいるナガレの姿をまじまじと見つめた。

「へえ、お前が凍土の遭難者か……」

兜を脱いでいるとはいえ、リオレウスの紅い鎧の威圧感は大きかった。モンスターの素材には生前の凄みが残ると鍛冶職人の間で話されているが、使い込まれたこの鎧からは、本当にリオレウスが前にいるような気がする。

「初めまして、『無尽太刀のシユラ』さんですよ」

しかしナガレはおじけづく事もなく、いたって冷静に話をした。

目の前のリオレウスがすごい形相で睨んでいるにも関わらず。

「俺の通り名、良く知ってるな」

「噂はよく聞きますよ」

シユラは噂になっていいる事に照れて頭を掻いた。といってもナガレが言う噂とは、新米ハンターに装備品を貸して減給になったとか、それに猛抗議して乱闘になりかけたとか、悪い噂しか聞いていないのだが。

そんなことは知らないシユラは嬉しそうにしているので、言わない方が幸せだろうとナガレは考えた。

シユラはあまり似合わないニコニコ顔で、自分のギルドカードを取り出して言った。

「んじゃカード交換としますか！」

「えっ、と……」

ナガレは少し間をあけて断る。

「私、カードを持ってなくて」

横にいた月歩もシユラに説明してくれる。

「ナガレさんはこれからハンターになるみたいですよ」

「ナガレ？」

シユラはその名前を聞いて、一瞬で顔を曇らせた。そしてまたナガレを睨み付けて、半歩距離を取る。

「業火竜弩って聞いてたからどれほどかと思えば、まだハンターに

もなつてなかったのか」

シユラは舌打ちをしながら続けた。

「親の遺品でハンター始めるつもりなら止めとけ。そんな簡単な世界じゃねーぞ、ハンターは……」

「シユラさん！？ その言い方は無いでしょ——」

「月歩君、いいんだ」

なぜシユラが邪険にしてくるのがわからなかったが、けなされている事だけは十二分にわかった。

「確かに凍土で死にかけたし、業火竜弩^{これ}だけでハンターになろうとは思わない。だが何であろうと、貴方に決めてもらうつもりはない。まっすぐな瞳でナガレはシユラを見つめて言う。その視線から何かを悟ったシユラは、無言のまま背中を向けて歩き出した。

「ちよつと……シユラさん！」

月歩は二人を交互に見たあと、紅い鎧の男を追いかけていった。

それ以来、ナガレはシユラと一言も話をしていない。

「よおし、これだけあれば大丈夫でしょ！」

月歩がパンパンになった袋を持ち上げると、ふらふらしながら背負った。

「ふむ、なら私も」

ナガレも袋を背負った。しかし袋は同じくらいパンパンだが、月歩のような危なっかしさは微塵も感じない。

二人は重い荷物を背に、ベースキャンプへと歩き出した。

「しかし、月歩君はいいのか？ その……彼と一緒にじゃなくて」

彼とは勿論シユラの事だ。ナガレは彼と距離をおく余り、無意識のうちに名前を口にしないよう話していた。

「シユラさんですか？ まあ、あの人はいつもそうなんですよ」

「いつも？」

「ええ。この前、新米ハンターが村にふらりと来た時も、あの人が一喝しちゃって……その人、怒って帰っちゃいました」

月歩はハハハと少しだけ笑って、すぐにうつ向く。

「村長さんから聞いたんですが、昔、大事な人を亡くしたみたいでそれから、新米ハンターにはきつく当たるようになったらしくて……きっと今は昔の事件を思い出してるから、僕がいても仕方ないんです」

月歩はそれ以上の事は言わなかった。ナガレも聞くのをやめて、黙って空を見上げる。

ハンターは狩るか狩られるかの世界。昨日元気に話していた仲間が今日にはいないということは、上位ハンターになるにつれて頻繁におこる事だ。だから上位のハンターは出来る限りチームを組み、クエスト失敗率を減らす。それが孤高のハンターとなり、他者との関わりを最低限にする。無情でなければ、ハンターは勤まらなかった。

シユラのように、過去の事件を心の傷にしているハンターも多い。それでも引退しないのは、やはりハンターの血が騒ぐのだろうか。ナガレはそう思いながら、曇天を見つめていた。雪がゆっくりと降りてくる。

「昔の事件か……」

ナガレがボソリと呟いた言葉は、雪を踏みしめる音で掻き消された。

採掘していた場所は結構な奥地だったので、一度洞窟を通り抜けないとベースキャンプにはたどり着けなかった。

さっきまで明るかった視界が急に暗くなって、目が慣れるまで時間がかった。

「ん？」

暗さに慣れたナガレの目に飛び込んで来たのは、白い泡状の固まりと、手幅くらいのこれまた白い生き物だった。

「こいつは……フルフルベビーかな？」

ナガレが鉱石の袋を足元において、白い生き物をつつついた。それは目がなく、口と体だけの芋虫みたいな奴だ。

「ギイギですよ。ほら、卵からでてきたっ」

月歩が指をさした白い泡から、ウニウニとギイギが姿を見せる。

「こつちではギイギというのか？」

「え？ ええ、あの親は毒液を使うギギネブラ……！？」

そこまで言って、月歩は悲鳴を上げた。

「痛い痛い痛い！」

「どうした月歩君！？」

見ると、月歩のお尻にさっきのギイギが張り付いていた。みるみる内に大きく膨らんで行くギイギに、月歩は辺りを転げ回る。

「ギイギか——」

「ナガレさんも、気をつけて……っ痛い！」

ゴロゴロと盛大に転げ回った拳げ句、壁におもいつきりぶつかるまでギイギは離れなかった。

「ああもう、こいつっ！」

月歩が背中中の銃槍を取り出して二三回つついた。そのあとおまけに砲撃を一発。太ったギイギは小さく鳴いて、パタリと動かなくなつた。

「痛かったなあ、もう」

「……アハハハハ！」

半泣きになっている月歩を見て、ナガレは思わず吹き出してしまった。

「ちょっと、笑い事じゃないですからね！」

「いやしかし……ハハハハハッ！」

「うう、ギイギの奴！」

月歩は恥ずかしさと怒りを、ギイギを量産している卵塊にぶつけた。

そこから少し進めば、また曇り空が頭上を覆う。

「ふむ、もう少しでキャンプだな」

ナガレが片手に袋、反対側の手に地図を広げながら言った。そのあとを月歩がふらふらと追いかける。

「ナガレさん、ちょっと待って……」

「ん。ああ、すまない」

月歩は荷物を下ろすと、ゼリー状の携帯食料を飲み込んだ。さっきの間に飲まなかったのは、一刻も早く洞窟から出たかったからだ。

「ふう。ナガレさんって、体力ありますね！」

「あ、ああ」

「それに地図の扱いとか手慣れてるし……」

月歩から不意に出た言葉に、ナガレは動揺を隠せなかった。

「体力は、ほら。月歩君は武器が重たいじゃないか！ 私はライトボウガンだから、構えたまま走れることもできるからな……」

そう言って誤魔化してみた。月歩が「そっか」とすんなり聞いてくれたので、ナガレは胸を撫で下ろした。リオレウスも狩れるハンターだったと言いつもりは微塵もない。

「さあ、早く村に帰ろう」

「はいっ」

ナガレは地図をしまつて、再びベースキャンプを目指して歩き出した。月歩がその後を追いかける。

しかしその時、ゴゴゴゴゴゴ……と地響きが遠くから聞こえてきた。二人は異変に気づいて足を止める。

危険な音は、着実に近づいていた。

続く

決別した過去（前書き）

携帯から切り込みます

激短文ですがお楽しみ下さい。

決別した過去

地響きが辺りに鳴り響く。それが二度目の、悪夢の始まりだった。
「なんだ？ 地震！？」

「これはまさか！」

二人は足を止め限界まで気を張り詰める。月歩は銃槍を、ナガレは弩を構えて臨戦体勢だ。

地響きは地面の浅い部分を進んでいるようで、ちょうど広場のまん中まで進んだそれは、何かに気付いたようにピタリと止まった。

雪が舞い降りる凍土はさつきと変わらず、時が止まったような錯覚を感じさせる。さつきから十秒たったのか一分たったのかだんだんわからなくなつて……。

「な、なんだ。ただの地震か」

月歩が気を緩め、大きくため息をついた。ガシヤンと銃槍を折り畳むと背中ベルトに引っかけて片付ける。

額の汗を吹きながら月歩は振り向く。だが、ナガレはじつと弩を構えたまま動かなかつた。

「ナガレさん、早くベースキャンプに戻りましょうよ」

「待ってくれ、今動いたら……」

ナガレはそこまで言つて、どう引き留めたらいいのか悩んだ。

おそらくこいつは、凍土に棲む大型のモンスターだ。しかも奴は今、自分達を待ち伏せしている……。それを素直に伝えたら、月歩も大人しく道を替えるか、少し待ってやり過ごしてくれるだろう。

しかし新米ハンターとしてユクモ村にいるのに、なぜそんな事がわかるのか、月歩は必ず疑問に思うだろう。そうなつては雪の町と変わらない生活に、いやそれ以下になつてしまふ。それは絶対に避けなければならない……。

「とにかく、嫌な予感がするんだ。このままじつとしておこつ」

苦し紛れにナガレは弁解した。

「ナガレさんはちょっと敏感すぎですよ。シユラさんが言ってたんですが、ハンターには大ざっぱさも必要です！」

ナガレの弱気な言葉をはじめ返すように、元気に言った月歩が歩き出す。

「大丈夫、きつと地震だったんですよ。ああもう、ギィギと言い地震と言い、今日はついてないや」

彼は地鳴りが止まった広場のまん中を避けることもせず、堂々と歩いていた。

「ナガレさんも早くっ」

後ろを振り向きながら月歩が呼んだ。そして同時に、彼の足下からわずかに音がしたのを、ナガレは聞き逃さなかった。

「月歩——」

ナガレは叫んだ。そして脳裏に、あの日のあの狩り……世界を崩す神に挑んだ日の事が浮かんだ。

決別した過去（後書き）

短くてすみません（；A´、A

しかしこの長さだと書きやすかったりする……。

おかげでストックまで作れました。

今後はちびちびと、ナガレの過去を公開していきます。

因みにナガレの過去話では、2ndの装備やモンスターの設定を使
ってますので、知らなかったら理解しにくいと思いますがご了承下
さいm（ー）m

日常と妹（前書き）

ここからナガレの過去話になります。

設定もセカンドのを使っているので、サードオンリーの方はごめんなさいm(┐┌；) m セカンド知ってる方は楽しんでくださいな(*´、´)(´)♪

日常と妹

ちょうど月歩に救われる数日前。ナガレは凍土の裏側に位置する、雪の町で生活していた。

狩りを坦々とこなす毎日。ナガレはそれに抗う事もなく、平凡に過ごしていた。今日も緑色に淀んだ鎧を着て、町と狩場を往復する。
「ただいま」

ナガレが家の扉を開けて、鎧姿のままベッドに飛び込んだ。

「あ、お姉ちゃん！」

声の後、ぺしぺしと頭を叩かれたナガレ。だるそうにつめきながら体を起こすと、そこには妹、ヒカリの姿が見える。

「もお、狩りから帰ったらすぐ着替えなさいって、何度言ったらわかるの？」

エプロンを着けているヒカリは、母親が子供をしつけるように言っただ。

「シートも汚れるし、お姉ちゃんだってお風呂入らないと汚いよ！」

ヒカリのお説教を、ナガレは黙って聞いていた。その顔はすごく不満そうだ。

「わるうございました」

全く謝るつもりのない謝罪の言葉を添えてから、ナガレはポーチから袋を取り出す。

「今日の報酬。素材の集まりが悪くて、いつもより少ないけど」

ベッドに投げ捨てるように袋を置いた。ヒカリは中身を確認した後悲しげな表情を浮かべる。

「お姉ちゃん……」

「明日はドスファンゴでも狩って、いっぱい稼いでやるからな」

ナガレはヒカリの頭をよしよしと撫でた後、注意されたとおり、着替えのために自分の部屋へと入っていった。

「……違うよ、お姉ちゃん」

姉の小さな背中を、ヒカリは扉が閉まるまで見つめ続けた。

彼女達の両親は三年前に亡くなっていた。二人は共にハンターで、父親は「狩猟王」と呼ばれるほどの実力者。町のみんなにすぐ慕われていた両親だった。ナガレはそんな両親に憧れてハンターになった。しかし、ギルドマスターからギルドカードを貰ったその日、両親は冷たい体で狩りから帰ってきたのだ。

それ以来ナガレは、残された幼い妹を守るため、大人に混じって狩りを続けていた。そんな彼女についた二つ名は「狩猟姫」。

「ふう」

ナガレがため息混じりに、雌火竜リオレイアの鎧を外した。するとその下にある肌があらわになる。汗と返り血でグツシヨリと濡れた肌は、打撲傷でアザだらけになっていた。妹のヒカリが見たら休めだの治せだのうるさいと思い、彼女にはずっと黙っている。

両親が亡くなってからというもの、妹は出来なかったはずの家事をそつなくこなすようになった。そのかわりにあれやこれやと口出しするように、ナガレは少し疎ましい気持ちもあった。

「もう少し女の子らしく、静かになつたらいいんだがな……」

ナガレは自分の事を棚にあげて、独り言を呟きながら服を着替える。それが終われば、すぐにベッドで寝てしまった。

ナガレが部屋で着替えている頃、ヒカリは一枚の紙を見つめていた。

「ハンターズギルド、入隊願……」

雪の町にある独立したギルド。本人の希望であれば誰でも入れるという、本家ギルドよりも随分と低い敷居だった。その為抱えるハンターの数は他の町より多く、集会所を兼ねた酒場はいつも賑わっ

ていた。

ヒカリは何度も書類に目を通し、詳細を確認した。そして明日、とうとうギルドマスターに提出するつもりになっていた。

「ギルドカード見せたら、お姉ちゃん驚くだろうなあ」

姉の驚く顔を想像してニヤニヤとしていたヒカリは、ふとカレンダーに目をやった。

明日は姉の誕生日。自分のギルドカードが、今年のプレゼントだ。

日常と妹（後書き）

現在あと二話ストックがある。

しかしホイホイ出せばすぐじり貧だよね！w

名前の由来

朝日が差す前に、ナガレはいつも目を覚ます。そして散らかった部屋にあるリオレイアの鎧を着て、業火竜砲を背負う。緑色に包まれた彼女は、亡き父とリオレイアのあだ名から「狩猟姫」と呼ばれた。

寝ている妹を起こさないよう抜き足で家を出ていく。そして町の中心にある集会所兼ギルドの酒場へと急いだ。

酒場にはいくつかのテーブルと、酒と料理を出すカウンター、クエストが張り出されるボードがある。今朝も数人のハンターが、元氣ドリンコをのんで眠気を覚ましていた。

ナガレが朝早くからギルドに来たのには理由がある。それは、報酬額の高い仕事を受けるためだ。

このギルドでは朝に一度、クエストの整理がされる。期限切れのクエストは外され、昨日依頼を受けたものが新たに張り出される。この新しい依頼の中でも、割りのいい仕事はハンター同士で取り合いになるのだ。

その為朝早くからハンターが集まり、今も数人のハンターが、ボードの前に立って話をしている。

「御早う」

ナガレが挨拶すると、その場にいたハンターは揃って振り向く。そして返事もせずヒソヒソと囁き合っていた。

そんな同僚の態度はお構い無しに、ナガレはボードに張り出されたクエストを見た。今日はレベル三十のクエストが一つと、十五のクエストがいくつかあるだけだった。

このレベルと言うのは雪の町特有の制度で、チームの合計がその数値にならないと受注できない仕組みになっている。本家では全てのメンバーのレベルが足りていないと受注できないが、こちらは後

輩が先輩についていくなんて事も可能になっていた。その分、星の数は本家より割高にはなっている。簡単に言くと、本家なら一人で狩りができる相手でもこの町だと仲間が必要で、逆にまだレベルが足りていない相手にも、先輩がいれば一緒に戦える……チームを組む事を前提とした調整だ。

因みにナガレのレベルは八つ。最高の十にかなり近い位置にいた。
「なあ、あんた」

突然、隣にいた男がナガレに話かけてきた。

「俺らこれから、この三十レベルのクエストに行きたいんだが……」
ボードに張ってあった紙を指差して、男が続ける。

「あんたがいればレベルが足りるんだよ、一緒に来てくれないか？」
依頼内容はナルガクルガの狩猟。ナガレの武器、業火竜砲は相性がいいし、何より三十レベルのクエストなんて滅多に出ないだけに報酬額もすこぶる良い。

「ああ、構わない——」

「お前ら、やめときな！」

ナガレの言葉を遮って酒場に男が入って来た。背中には大きな狩猟笛を背負い、バサルモスの鎧を着たハンターは、ずかずかとナガレの前に詰め寄った。

「なんだ、ミラン？」

ミランと呼ばれたハンターは殺気をむき出しにしている。ナガレはその態度に困惑していた。

「なんだとは何だ！ また仲間をダメにするつもりか！？」

「あつ……、あれは何度も言うが——」

「言い訳はいらない、お前が仲間を殺したのは、事実なんだからな！」

ナガレの言葉をはねのけた後、ミランは次にナガレを誘ったハンターを睨んだ。

「こいつを仲間にしたら、お前ら殺されるぞ……！」

男達はミランの凄みを効かせた一言に、何も言えなかった。ヒソ

ヒソと仲間内で相談した後、十五レベルのクエストを三人で受け付けて、そそくさと酒場を出て行ってしまった。

その光景を唇を噛み締めながら見ていたナガレは、ずっと黙って我慢していた。

「ミラン」

二人になった酒場で、ナガレは頭を下げる。

「確かに私はバクを死なせてしまった……しかし、それも昔の話だ。いつまでも引きずるのは止めて欲しい」

ナガレは過去の過ちを悔やみ深々と頭を下げた。しかしその思いは、ミランには届かなかった。

「俺の最高の相棒、爆弾好きの奴だった……。それを、爆弾ごとアイツを撃ったお前は……この手で殺してやりたいくらいだっ」

だが、とミランは続ける。

「俺はバクを殺したお前と同じにはならない。絶対に……」

ミランはそう言い残して、一人でクエストを受注した。過去の傷をえぐられたナガレは近くのイスに座り込み、一人うつ向いたまま黙りこんだ。

一年前。

ナガレがまだ狩猟姫と呼ばれる前の事だった。当時リオレイアの防具を作るために手当たり次第にクエストを受注していたナガレ。あと一つリオレイアの鱗があれば全身装備が整うという時、たまたまミランとバクのチームに入れてもらった。

ミランが狩猟笛でサポートとめまいを、バクが片手剣で翻弄と爆弾を、ナガレが狙撃を。初めてのチームとは思えない程の相性の良

さに、三人は楽しく狩りをしていた。

しかし。

リオレイアが瀕死になり、ちょうどミランがめまいをさせて、バクが爆弾で止めをさそうとした時。

ナガレの撃った弾が爆弾に当たり、リオレイアと共にバクが吹き飛んだ。

至近距離で受けた爆発に彼は命を落とした。ミランは友の死を嘆き、怒った。ナガレはリオレイアの鎧を作り「自分の利益の為なら仲間を殺す、わがままな姫」という意味の二つ名を背負った。

悲しい過去を思いだし、頬を一筋の雫が伝う。

「ふああ、おはよー」

そんなナガレの気持ちとはうらはらな口調で、酒場にまた男が入ってきた。ナガレはとっさに涙を拭いて顔を上げる。

「何だクマルか」

「おいおい、何だったのは酷いな」

クマルは鉱石で作った大剣を背負い、これまた鉱石で作った鎧を着ていた。鉄の綺麗な輝きがなんともまぶしい。

「新調したんだぜ、カッコイイだろ？」

「元が不細工な分で帳消しだな」

「酷っ！」

落ち込む姿を見せるクマル。しかしナガレには、内心全く落ち込んでいないと理解していた。一方ナガレは暗い表情で、誰が見ても落ち込んでいるとわかるくらい顔に出ていた。

クマルはその表情からすぐに何があったか理解した。

「またか、ったくミランの野郎」

「いいんだクマル、いいんだ……」

「よかねーよ！ あの事故の原因は、ただの跳弾なんだろう？」

跳弾。レベル三通常弾を使っているハンターならわかるだろうが、あの弾は辺りに跳ねる特性がある。あの日もバクを狙った訳ではなく、リオレイアの翼に当たった弾が、その下にいたバクを襲った、神様のイタズラとでも言うべき事なのだ。

しかしこの町には何故かガンナーのハンターが一人もいなかった。みな近接武器を持ち、鍛え上げた肉体を使って戦う。その為跳弾など誰も知らずにただナガレが撃ったという噂話が広まってしまったのだ。

「まったく。弁解しないお前も悪いけどな、ひとまずミランには自分の口から伝えておけよ」

「……すまない」

謝るとこじやねーよ、と頭を掻きながらクマルは言った。

名前の由来（後書き）

引き続き不定期更新で進めさせていただきますm（
|
|
:）
m

お猿と姫様

「あんれー、狩獵姫様と万年シタツパじゃないのー！」

そんな奇声を上げて酒場に入って来たのは、雪の町では有名な双剣使いのガルシアだった。

雪獅子ドドブランゴの鎧一式に身を包んだガルシアは、背中には鉾石で作られた双剣「ハリケーン」が輝いている。ここ雪の町は近くに坑道があるので、クマルやガルシアを含め鉾石で作った武器が主流だった。そのため大型獣の素材を使った武器は指折りの人数しか持つておらず、それだけで強さの証とされている。

雪獅子の毛皮を羽織るガルシアだが、中身はホラ吹きババコンガとして有名だった。得意技は陰口とトンズラ、そしてうぬぼれである。

そんな彼は他のハンターに好かれるはずもなく、ナガレもできれば関わりたくないと思っていた。

そんな彼の後ろには二人のハンターがいた。片方は細身の腕に長身な男、そしてもう片方は丸く太っている男だ。彼らは大股で歩くガルシアの後ろを常について回る弟子達だ。

二人共ガルシアが双剣使いに仕込んでいる自発的なのか師匠の言い付けなのか、髪型もガルシアと同じだった。

「兄貴、今日は誰を狩るんすか!？」

「おいら、楽しみだなあ」

力とスピードが命の双剣にとって、この二人の体格は相性がいいとは言えなかった。それでも師匠であるガルシアは彼らを溺愛しているようで、いつもチームで行動している姿を見かける。

「おいババコンガ三兄弟、今日はどこにピクニックだ？」

クマルが茶化して言った。口に出さないが、ナガレはナイスと親指を立てて合図する。

「うるせー万年シタツパ野郎！ 悔しかったら這い上がって来やがれ！」

因みに説明すると、ガルシアのレベルは八、後輩は二人とも七。一方クマルはたったの二。なんとクマルは駆け出しハンターと同じレベルだったのだ。彼はただ進級試験を面倒だと受けていないだけなのだ。

「お前達がレベル八とは、このギルドも堕ちたなあ」

「るせえ、それはお前みたいな奴がいるからだろうが！」

「そつだぞぉー」

自分の力ではなく、ガルシアに助けてもらったお陰でレベル七になった弟子達が騒ぐ。彼らはガルシアがいなければきっとレベル四止まりの実力しかないはずなのだ。

「おいおい弟子達よ、そんなに吠えたらみっともないだろ？ ここは強者の風格つてものをだな……」

ガルシアが弟子をなだめつつ自慢話を始めた。いつもの事なのでナガレとクマルは無視している。

ガルシアは一通り話終わると、やっとクエストボードに眼を向けた。そしてすぐに一つのクエストに釘付けになる。

「レベル三十、ナルガクルガ狩猟、か！」

相手にとって不足はない、報酬額も悪くない。ガルシアはとたんにニヤニヤと笑みをこぼしだした。

あとはレベル合わせの仲間を呼ぶだけだ、自分と弟子のレベルを合わせて二十二、あとレベル八のハンターがいれば受注できると、ずる賢い頭が一瞬で答えをはじき出す。

「狩猟姫様あ、チーム組みましょー!」

「……は？」

はつきり言つて、ナガレは彼らと関わりたくなかった。非常に悪い噂の種になるからだ。しかし向こうからの誘いを蹴れば、またなんと噂されるか……。

「な、何かな？」

「だから、これさ!」

ガルシアはボードから依頼書を半ば引きちぎるように取るとナガレに突きつけた。それはさっきの、ナルガクルガのクエストだ。

「俺たちで二十二レベル、姫様がいればちょうどなんだよー!」

さつき確認したからわかる事だが……このクエストはすごく美味しい。妹に約束したドスファンゴを狩るより遥かに美味しい。

ふと妹の顔が思い浮かぶ。最近は笑顔も見せなくなった妹も、これくらい一気に稼いであげれば喜ぶだろうかと考える。

「……わかった、受けるよ」

「さすが姫様、話がわかるうー!」

その金額に目がくらんだナガレはつい、チームを組むと約束してしまった。

ガルシアの後ろにいた後輩が、ひっそりと彼に告げる。

「兄貴、狩猟姫なんて仲間にしない方がいいんじゃない？」

「お、おれ、殺されたくない」

「レベル合わせに誘っただけだつて。こんな美味しいクエストは滅多にないんだ……思いきり稼がせて貰うぜ!」

そんなババコンガ三兄弟を気にも止めず、ナガレはただ、喜ぶ妹の姿を想像していた。

お猿と姫様（後書き）

次回はやっと狩りの時間です。

技術と相性（前書き）

やっと戦闘開始です。

で、一瞬で終わらせます（蹴

技術と相性

森丘の一角でナルガクルガの眼が光る。ガルシアのかわいい弟子達は双剣で一斉に斬りかかっていくが、その太刀筋はまるで子供のお遊びのようにヒョロヒョロだった。

「シャアアアア！」

ナルガクルガはそんな攻撃を一喝——バインドボイスと呼ばれる、モンスターの声帯を使った攻撃——の下に封じ込めた。双剣は盾が使えない分、モンスターのバインドボイスなどはしっかり身に受けないといけない。そこが片手剣や槍と違って難しいところだ。

咆哮に耳を塞ぐ弟子達。助けようと前に出たガルシアもまきぞえを喰らって動けなくなるといふ、弟子も師匠も情けない格好になっていた。

「うるせー猫だなあ！」

両手で耳を塞ぐので身動きが取れない三兄弟を、ナルガクルガは尻尾で軽くあしらう。三つの陰が宙に舞った。

ナガレは耳を塞がなくていいギリギリの場所から、彼らの様子をポーッと眺めていた。

「ナガレも手伝え！」

「手出し無用って誰が言っただ？」

ガルシアにため息まじりの返事をしたナガレは、雲一つない快晴な空を見上げる。後はババコンガ達に任せていればいいとは、なんて楽なんだろう……。

穏やかな風に乗って、三兄弟の会話が聞こえてきた。

「兄貴、落とし穴、設置しましたぜ」

「っしお前ら、誘導開始だ！」

それを聞いてナガレは硬直した。まだ戦闘が始まったばかりなのに切り札の罠を仕掛けるなんて愚の骨頂だ。罠はモンスターが弱っ

た時や疲れを見せた時に使う。新米ハンターでも知っている知識を、高レベルのハンターが知らないとは思わなかった。

しかし同時に、アイテムは最大限使えという教えもある。ナガレはそれに則って、落とし穴を無駄にしないように、ポーチから音爆弾を出して馴れた手つきでナルガクルガにぶつけた。

キーンと耳をつんざく音が響く。ナルガクルガは一瞬だけひるみ、眼を真つ赤にさせて怒り出した。

「ななな、何やってるんだバカ姫！」

「落とし穴、使っただろう？」

「じゃあなんで音爆弾で怒らせるんだよ！」

ガルシアまで眼を赤く充血させて怒っている。それが何故なのかナガレには理解できなかった。

「兄貴、俺たちじゃ手に終えません！」

「おいら、こわいっ！！」

怒り狂ったナルガクルガのスピードは熟練ハンターでも見極めが難しい。自力ではなくガルシアにレベルを上げてもらった彼らが見切れるはずがなかった。

「くそがつ、一旦引くぞ！」

「ラジャー！！！」

間抜けなババコンガ三兄弟はナガレを残して一目散に逃げ出した。

「……で、ナルガクルガを一人でやるのか？」

「お前が出てこなければ、な」

突然、がさがたとナガレの後ろにある茂みから青く光るマカライトの鎧を着た男が出てきた。

「なんでクマルがここに？」

呆れ顔でナガレは聞く。

「ちょっとアオキノコ採りにな」

「稼ぐなら燃石炭の方が効率的だったんじゃないか？」

「気分転換さ、クーラードリンクの味も飽きたしな」

ぐぐつと伸びをしたクマルは、ナルガクルガを見据えて肩を回した。赤色の瞳と視線が交差した時、ナルガクルガは二人めがけて飛びかかる。

「クマルも物好きな奴だな」

「ここに来たのはたまたまだぜ、たまたま」

ナガレが背中中の弩に弾をつめ、銃口を敵に向ける。クマルは背中の大剣、カブレライトソードに手をかける。そして攻撃をかわすどころか、自分から当たりにいくように前進した。

一步、二歩、三歩。

クマルが進んだ歩数はたったそれだけだった。その位置で大剣を縦に降り下ろし、突出してくるナルガクルガの脳天に重たい一撃をぶちかます。

「お見事」

森の一角が赤くそまり、モンスターの悲鳴が響く。クマルは止まる事なく今度は横にふり、敵の足を払いバランスを崩させた。

その時ナルガクルガの眼に見えたものは、ハンター達のゾツとするほどの気迫と、ナガレのもつリオレウスの弩だった。

ナルガクルガは熱に弱い。そして弩の赤いフォームは火竜の鱗でおおわれ、強力な炎を撃ち出せる。

ナガレの弩が吼え、モンスターめがけて火炎弾を連射した。全て顔面に吸い込まれるように命中する。熱が顔を焼き、ナルガクルガは悲鳴を上げた。しかしナルガクルガの闘志は途絶えるどころか、さらに燃え上がるように眼が血走る。

一度体勢を立て直すために後ろに数メートルほど跳んだ。そして弩を構えるナガレを睨み付けていた。

だが怒りのあまり、ナガレ意外の存在を忘れていた。

「いただきまーすっ!!」

ナルガクルガは戦慄した。ザクリと後ろで音がして、直後襲いかかる猛烈な痛み。悶えてまた崩れ、じたばた体を動かすと体に違和感を感じた。

自慢の黒い尻尾が、大剣によってぶち切られていたのだ。

大剣の溜め斬りは恐ろしく強力だ。全てを絶ち斬るその刃は、すでに鈍い赤に染まっていた。

連続で繰り広げられる敵の猛攻にさすがのナルガクルガも我慢の限界なのか、足を引きずりながら二人と距離をとり始めた。しかしその眼はまだ赤く、復讐を誓うモンスターの眼だった。

クマルは大剣を背中にしまうと、ポーチからボールのようなアイテムを取り出して、ナルガクルガに投げつけた。ベチンと潰れたボールからは独特の匂いが広がる。

ナルガクルガは気にする事なく逃げる。その先に何があるかも知らずに。

突然ズドンとナルガクルガの足元が崩れ、からだ半分が地面に埋まってしまう。そう、あのガルシアの弟子が設置した落とし穴が作動したのだ。

「おやすみ」

ナガレはクマルの投げたボールと同じものを投げつける。それはナルガクルガの意識を完全に遠ざける——捕獲用麻酔玉だった。

ナガレとクマルは驚くほどの技術と経験、
相性によってナルガク
ルガを捕獲した。

赤衣の男

じきにギルドの捕獲輸送班が、捕らえたナルガクルガを連れて行くための台車がやって来るだろう。ナガレはそれに便乗して町に帰る。

「それじゃ、先に帰ってるぜ」

クマルは迎えが来る前に狩り場を後にした。彼は素材ツアーで森丘を訪れたので、それ用の馬車に乗って帰るのだ。もちろん捕獲輸送班に見つかったら規約違反の減給は免れないので、彼らから逃げる意味も含んでいるが。

「ありがとう、クマル」

「ふっ、これくらいなんて事ないさ。妹さんによろしくな」

軽いあいさつを交わしてクマルは森の闇に消えた。

「……なんで妹が出てくるんだ？」

ボソリと独り言を呟いたナガレは、曇り始めた空を見上げて妹の事を考えた。このクエストの報酬金を持って帰れば久しぶりに妹の笑顔がみれるだろう……。そう思うとなんだか自分まで嬉しくなってきた、想像しただけでふふっと笑みがこぼれていた。

「さあナルガクルガ！ この歴戦の勇者ガルシア様が相手だあ！！」

そう叫びながら飛び出てきたのは、雪獅子の毛皮を着たババコンガ——もとい、ガルシアだった。赤い双剣独特のオーラを放って、

さらに怪力の種と忍耐の種を食べたのだろう。気迫を纏って、まるで寸劇でもするかのように現れた。

「さあさあナルガよ……って終わってるし!!」

「遅かったな」

ナガレはため息をついて滑稽な勇者を迎えた。そしてその勇姿を見ようと、数秒遅れてついでにきた弟子達も。

「さ、さすが師匠！俺たちが来る一瞬のうちにしとめちまうなんて!!」

「師匠、すごいんだなあ!!」

弟子達は疑う事なくガルシアを誉めちぎる。一瞬だけ硬直していた師匠だったが、すぐに両手を腰に当てて胸を張った。

「お、おうよ！俺様にかかればこれくらい楽勝だぜつ!!」

意気揚々としている見栄っ張りな師匠にして、全く疑わない馬鹿な弟子。ほんと相性がいんだなとあきれたナガレだった。

ナガレとババコンガ達が酒場兼集会場に帰ってきた時にはすでにお昼時で、大勢のハンターで賑わっていた。雪の町は住人の半分がハンターという人数だったので広い酒場も今はぎゅうぎゅうづめだ。ギルド独特のレベル制度のお陰で、ガルシア以外にも彼らのように師弟関係を組む者が多く、初心者からベテランまでざくばらんに話をしている姿が伺える。

その上正午には初心者用のクエストが大量にクエストボードに貼

られるため、それ目当てのハンターもまた酒場の賑わいに貢献していた。

とにかく今、酒場は大盛り上がりということだ。

「お帰りなさい、皆様ご無事でなによりです」

受付嬢がナガレ達にあいさつした。彼女は冷たくロボットのように決められた台詞と応対で、報酬金と素材を受け渡す。

「全額で二万ゼニー、四名様でクリア、保護人数零人ですので合計金額五千ゼニーでございます」

袋に詰められたお金を受けとる。これだけで昨日の報酬金の倍額をもらえたナガレはさらに受付嬢に注文した。

「素材は全て売却する。換金額はいくらになる？」

「はい……今回は捕獲した為レア素材も含みますので、一万ゼニーほどになると思われます」

「ではそれでよろしく」

かしこまりました、と受付嬢は一礼するとすぐに素材の鑑定に入った。それが終わるまでカウンターで待機するナガレと違って、ガルシア一行は素材も受け取り、狩りの打ち上げを始めていた。

素材の換金も終わり報酬金とあわせて大金を稼いだナガレは、酒場をぐるりと見渡した。

この町は本当にガンナーがない。皆が皆、太刀や双剣、大剣を

背負っている者が多く、ガンランスや狩猟笛のハンターも少ない傾向にあった。それはきつと手入れのしやすさに原因があるのではとナガレは思う。

通常、刃物は入念に手入れをしないと血でさびて使えなくなってしまう。それさえ難しいのに、ガンナーの武器や狩猟笛などは精密機械でもある。ちよつとゴミが詰まるだけでも性能がガクンと落ちる。ガンランスなんかは可動部分に小石が挟まっただけで動かなくなる。と聞いたことがある。

ナガレとしてはそんな手のかかる武器だからこそ愛着がわくと思っ
ているのだが、この町で賛同してくれる人物は残念ながらいなかった。

ガンナーとしての狩猟スタイル、過去の事故、あと少し性格の固さから、ナガレに話しかけるのはクマルとガルシアくらいだった。だから、今日のように話しかけられる事は滅多にない。

「闇星ナガレ、だな」

後ろから突然自分の名前を呼ばれたのでナガレはついビクリと体を振るわしてしまう。あわてて振り返ると、フードを深く被って顔を隠す赤黒い衣服に身を包んだ二十歳くらいの男が突っ立っていた。

「ふむ、奴の面影が少し感じられるな。やはり血のつながった家族か」

「あなたは……誰だ？」

赤衣の男はナガレを知っているようだが、ナガレはこの男を全く知らなかった。そして残念なことに、ナガレの異名である狩猟姫の名前は各地に広まっていた。その腕前を確かめにわざわざ別の町からやって来た物好きなハンターも過去にはいた。……まあミランに一喝されてチームを組む事はなかったが。

その時のハンターのように、この赤衣の男も物好きさんなのだろうかと思いを張り巡らす。

「失敬だな、初対面の相手を物好きと決めつけるなんて……」

ドクンと心臓が脈打つ。目の前にいる男が、自分の考えを読み取ったのだから。

「な、何者!？」

「まあ警戒するな。私は敵ではない」

男はそう言ったが、室内にも関わらずフードで顔を隠し、名前も明かさないう人間を警戒しないほうがおかしいだろう。

ナガレは自然と背中にある火竜砲に手を当てていた、いつでも抜けるように。

「その闘争心、その集中力、その気迫……やはり君を選んで良かった。これからの活躍に期待しているよ」

そう言った男はナガレの肩を叩こうと手を伸ばした。が、ナガレが警戒して後退りしたので、その手は空をつかむだけだった。

男は残念そうにため息をついたあと、人混みをすり抜けるようにして酒場を出ていった。

「……待てっ!」

ナガレは彼を追いかけて酒場を出ようとしたが人込みのせいで走れない。寒空の下に飛び出した時にはすでにその姿は見えなくなっていた。

同じ誕生日

ヒカリは自分の部屋で、鍛冶屋に仕立ててもらった白い鎧に腕を通してみた。鎧は思っていた以上に重量があって驚いたが、その分厚くてしなやかな鱗の一枚一枚がもつ安心感は、初心者用のそれとは雲泥の差だった。

腕、足、腰、頭の一式をベリオロスの白い素材で作られた装備が覆うと、数分前のか弱い少女の姿を一人前のハンターの姿へと変身させた。鏡の前に立って自分の姿を眺めてみるが、どこか別人みたいな気がする。

「これがハンターの装備……」

姉の姿を毎日見ていた彼女だったが、実際に着たのはこれが初めてだった。普段着の数倍重たい鎧をつけて、一体どれほどの相手と戦ってきたのだろうか。想像の及ばない世界に彼女はただ期待するばかりだった。

「ただいま」

疲れきった声が扉の向こうから聞こえたので少女はあわてて部屋を飛び出す。

「お姉ちゃん！」

「ヒカリ、ご飯できて……？」

この日をどれほど待ちわびたことだろうか。ヒカリは帰ってきた姉をその姿のまま出迎える。

姉であるナガレは妹の姿をみて驚いたのか、手に持っていた袋を

床に落として言った。

「お前、その装備は」

「可愛いでしょ！ お父さんが残してた異国の素材で作ってもらったんだよ。ベリオロスって言うんだって！」

くるりと一回りして見せると所々についた白い毛がなびく。

「あともう一つ、見せたいものがあるの！」

ヒカリは扉の前で固まっている姉に、テーブルの上に置いてあった真新しいカードを見せつけた。それはハンター全員に支給される証、ギルドカードだ。

闇星ヒカリの名前とハンターランクを示す星が一つ、そしてギルドの認定印。発行日は今日だった。

「これで私もお姉ちゃんのこと手伝えるよ！」

「ヒカリ……」

少しの沈黙のあと、ナガレは妹に言った。

「どうして言ってくれなかったんだ？」

ナガレの瞳に映っていたのは憤怒と困惑の感情。そしてその言葉は冷たい刃のようにヒカリの心に突き刺さった。

「ハンターになるという事は、死と隣り合わせになることなんだぞ？ いつ死んだっていいという覚悟と、生き抜く信念を持って狩りに望む——」

「わかってる！」

姉の言葉をさえぎってヒカリは反論した。

「毎日お姉ちゃんが私のために命を掛けてることも、無茶ばかりしてたくさん怪我してることも、一人でおっきなモンスターと戦ってることも！ 全部知ってるんだからっ！！」

そこまで言うと、いままで貯めていた想いが込み上げてきて視界がだんだんぼやけてくる。

思わず姉に抱きつくと、雌火竜の鎧についた砂や泥、血の汚れが見えてよけいに悲しくなった。

「それなのに私は何もできなくて、何かの役に立ちたくて、これは私なりに考えた結果なの！ こうすれば、いつでも一緒にいれるから」

「ヒカリ……」

「お姉ちゃんと私、誕生日が一緒なんだよ？ 今日が私のハンターとしての誕生日。これからは二人で楽しく過ごすんだからね」

妹の一言にナガレはふと気づかされる。いままで両親が亡くなっ
てからというもの、お金に不自由はさせまいとがむしゃらにクエストをこなし、朝早くから夜遅くまでずっと、妹を孤独にしていたことを。

「……ごめん」

ナガレは泣きじゃくる妹を優しく撫でた。

「ご飯食べたら、集会場にいこうな。お前の初クエストと一緒に受けよう」

いつしかナガレの瞳からも、大粒の涙がこぼれていた。

* 作品凍結のお知らせ

申し訳ないのですが、『リロード』を凍結することにしました。

理由としては、プロットを組んだにもかかわらず、それが甘すぎて脱線したことです。

『銃槍ファイト』『折れた牙折り』との兼ね合いが引き金になって、ぼろぼろとほころびが出てしまいました。

* 詳しくは10/27付けの活動報告に乗せました。

また連載が二本になったことで、作品の維持が難しくなっていました。

というわけで、お気に入り入れてくださってる方には申し訳ないですが
しばらく更新を見合わせます。

ただ、必ず同じテーマで帰ってきますので！
そのときはよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2516t/>

リロード *凍結中*

2011年11月14日13時34分発行